教職員と市民でつくる人権教育情報紙

はじけるこころ

Vol.55

まいにち学校 まいにち街 人権の中 こどもの笑顔につなげる

編集・箕面市人権教育推進会議
発行・箕面市教育委員会人権施策室

TEL：072−724−6921

E-mail：edujinken@maple.city.minoh.lg.jp

令和5年（2023年）3月

この情報紙は、保育所・幼稚園・小中学校の保護者をはじめ、広く市民のみなさんに、身近な人権教育の話題を知っていただくため、市民参加方式で編集したものです。

ご家庭で子どもさんと、あるいはご近所や職場のかたと、こうした話題にふれて、語り合っていただければと思います。

らいとぴあ21「2022かやのお宝人権まつり ～出会い・つながり・げんき～」を終えて

「つながり」と聞いて、どのようなことをイメージされるでしょうか？

今回のかやのお宝人権まつり（以下、お宝まつりと略します）は、コロナ禍で集う場をひかえる状況下で、お宝まつりを通して、何を大切に市民のみなさまや関係団体のかたとつながっていくのかを考える機会となりました。そのことを踏まえ、今回、この「はじけるこころ」をとおして「つながり」についてみなさまと一緒に考えてみたいと思っています。

コロナ禍になり3年が経過し、私たちの周りでは、オンライン・SNSなどでのつながりが急激に普及しました。多くの人は、携帯電話・スマートフォンを持ち、いつでもどこでも必要な情報や頼れる人とつながれる状況にあるように思えます。ですが、本当に「困った時に頼れる関係づくり」は実現しているのでしょうか？

今年度のお宝まつりは、陽気に包まれた10月29日、2年ぶりに「屋台あり！ステージあり！大きなアート作品あり！レアキャラ登場のスタンプラリーあり！」と、お宝まつり本来のにぎわいを感じることができるものとなりました。

5月にお宝まつり実行委員会が結成され、お宝まつりの計画が始まり、本番をめざして準備の幕が上がりました。毎月の実行委員会では、本番で市民のかたがたによろこんで参加して貰えるように、腕組みをして考えたり、新しい意見や知恵をだ

もくじ

らいとぴあ21「2022かやのお宝人権まつり ～出会い・つながり・げんき～」を終えて …… 1
国際理解教育「世界の国からこんにちは」（とよかわみなみ幼稚園） …… 3
障害理解教育「NPO法人プラスWeさんとの出会いから学ぼう」（中小学校） …… 4
イキイキさわやかに学ぶ会「あなたの身近にもいるLGBTQ＋～男女やLGBTだけじゃない！性のあり方は十人十色～」 …… 5
あすチャレ！スクール ～パラスポーツをとおして共生社会を考える～ …… 6
学校図書館司書コーナー 図書館で「つながる」趣味の輪 ～折り紙をとおして～ …… 8
編集後記 …… 9

したりとまつりの成功に向けて、企画の工夫を積み上げていきました。

今回のお宝まつりでは「心をつなごう」という言葉が実行委員会のメンバーで設定したテーマでした。実行委員会メンバー、参加団体のかただけではなく、当日参加のボランティアのかたや、学校の取組の一環としてお宝まつりに関わる中学生たちにもそのキーワードを伝えました。スタッフとして市民のかたに挨拶をすることや困っておられるかたに声かけをすることで、参加者にあたたかな「つながり」を感じてもらえるお宝まつりにしたいと話をしていました。

当日は、会場全体を使って行われるイベント、ステージを使ったイベントなど、会場の様々な場所で人と人をつなげるための催しが行われました。その中では、子どもたちの活躍もたくさん見ることができました。特に、小学校高学年や中学生の子どもたちがそれぞれの役割や、ボランティアとして、また、ふとした場面で、人と人を結びつけてくれていたように思います。子どもたちのこのような経験は、一人ひとりの自信につながり、結果として、今後の地域や社会を担う一員に育ってくれるのではないのでしょうか。

お宝まつりを終えて、関わってくださった多くの人たちが、人とつながることの大切さを実感してもらえたのではないかと感じています。

お宝まつり終了後の実行委員会で、ふりかえりをした際には、「会場で受付をしていたり、レアキャラのかぶり物で歩いていたりすると沢山のかたに質問されて、色んな人と顔見知りになれました」や「スタンプ会場のいこいの家の行きかたが分からない低学年の子を見かけた高学年の子どもが、道案内をしている様子があって、高学年の子の成長を感じることができました」「一人で出店している市民のかたが荷物運びに困っているのを見かけた中学生が、『お手伝いしましょうか』と声かけをして手伝っていた」など、それぞれのかたが、お宝まつりの中で感じた、見つけたつながりの場面を感想として語ってくれました。

関係団体から参加されたかたの中には初めてお宝まつりの運営に関わったかたも多くおられました。大前提は、市民のかたがたに「つながり」のあたたかさ、大切さを感じてもらうためのお宝まつりでしたが、お宝まつりを運営していた実行委員にとっても出会いの場となり、人とのつながりのよさを感じることができる機会となったようでした。互いの意見を交わしながら物事を進めたこと、お宝まつり当日に市民のみなさまと交流することでつながりをつくれたことは私たちにとっても大きなことであったと感じています。「実行委員会を通じてつながりや関係性ができた。日常の活動でも活かしたい。」という感想もあり、今回紡ぐことができたつながりは、結果的に、お宝まつりに参加された団体のかたがたが、日々、市民のかたを対象に行っている活動や、日常の活動にも良い影響が生まれていくように思います。

冒頭の問いかけである「つながりとは？」を一言では言い表すことはできませんが「目と目を合わせて互いを受け入れあうこと」「互いの存在を感じた上で頼り、頼られることで信頼感が強まること」「役割を担う時に、より責任感が生まれ、周囲からの期待が深まること」だと思っています。時には、頼られ過ぎるなどで、つながることはわずらわしいと感じることもあると思います。しかし、「もうしんどい」という自分のSOSの気持ちに気づき、そこから誰かや何かに頼ることも人として大事なことかもしれませ

ん。

今回、お宝まつり実行委員会のかたがたと同じ時間を過ごせたこと、当日、参加された市民のかたの笑顔や頼もしい子どもたちの姿を見ることができたことで、あたたかい気持ちになることができました。そうなれたのも「心をつなぐお宝まつりを作ろう！」と想い描きながら継続してきたこと、参加してくれたみなさまがあってのことだと思います。今後も豊かなつながりあるまちをつくる機会として「かやのお宝人権まつり」をみなさまとつくっていきたいと思っています。

（かやのお宝人権まつり実行委員　らいとぴあ21　吉田）

国際理解教育「世界の国からこんにちは」

（とよかわみなみ幼稚園）

とよかわみなみ幼稚園では令和4年9月16日（金）に「世界の国からこんにちは」という国際理解教育の取組をしました。とよかわみなみ幼稚園の特色ある取組の一つです。

国際色豊かな小野原地区には、箕面市立多文化交流センターという国際交流の拠点となる施設があり、箕面市国際交流協会（ＭＡＦＧＡ）のみなさんが多文化共生のまちづくりをめざして活動されています。今回の取組では、園児の保護者とＭＡＦＧＡのかたをゲストとしてお迎えし、シリア・リビア・タイの国の言葉や文化、遊びを教えていただきました。

それぞれどんな国なのかな？

取組のスタートでは、それぞれの国の言葉や文化、またゲストのかたのおすすめの場所を紹介していただきました。タイの寺院、シリアのモスク、リビアの海岸や遺跡の写真に子どもたちは「行ってみたい！」「めっちゃきれい」など声をあげ、興味津々な様子でした。それぞれのあいさつの言葉を教えてもらうと、まねをして言ってみようという子どもたちの姿が自然と見られました。「英語みたいだけどちょっとちがう」「言うのが難しいけどかっこいい」と言った感想が聞かれました。

タイ

シリア

リビア

遊びを体験しよう！

子どもたちが一番夢中になったのは何と言っても遊びの体験でした。インドの紙芝居、シリアのイス取りゲーム、リビアのジャンプゲームの3つの遊びを、興味関心に応じて選びながら、体験していきました。どの遊びにおいても、ゲストのかたとコミュニケーションを取りながら笑顔で楽しんでいる様子が見られました。

全体で感想を共有した際には、「シリアのイス取りゲームは日本と似ていたよ」「流れてくる音楽がシリアの言葉ではじめて知ったよ」や「ももたろうは桃から生まれてくるけど、かいたろうは貝から生まれてきたから不思議だと思ったよ」、「ジャンプゲームは6の所までいけそうだったけどいけなかった。難しかったけど楽しかった」など自分の言葉で楽しかったことを友だちや先生、ゲストのかたに伝えることができました。

ちがいを豊かさに

子どもたちは大人以上に柔軟です。すぐにゲスト

のかたがたと仲良くなり、あれこれ質問したり、会話をしたりしながら時間があっという間に過ぎていきました。

よい出会いは、あたたかい関係を紡ぎます。「楽しかった」という気持ちが「もっと知りたい」「一緒に遊びたい」という思いにつながり、新しい世界を広げてくれます。言葉や文化、国籍のちがいを越えて、多様性を尊重しあう気持ちやつながりが、子どもたちも地域も豊かにしてくれると感じることができた取組となりました。

（とよかわみなみ幼稚園長　金﨑　揚子）

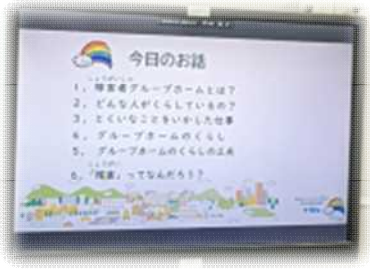
障害理解教育「NPO法人プラスWeさんとの出会いから学ぼう」

（中小学校）

中小学校では、令和4年11月29日（火）にNPO法人プラスWeのかた、プラスWeが管理している障害者グループホームの入居者のかたをゲストティーチャーとしてお呼びし、4年生で障害理解の学習を行いました。

子どもたちの「おはようございます！」という元気なあいさつもあり、和やかな雰囲気で始まった授業は、①障害者グループホームとは？②どんな人がくらしているの？③とくいなことをいかした仕事④グループホームのくらし⑤グループホームのくらしの工夫⑥「障害」ってなんだろう？の順番でお話が進んでいきました。

最初は障害者グループホームの説明です。障害者グループホームとは、「障害のある人が、大人になり家族のもとを出た後に、4人くらいで互いに助け合ったり、お助け役のスタッフに手伝ってもらったりしながら暮らす家」のことだと教えていただきました。子どもたちにとっては、あまり馴染みのない言葉だったのですが、真剣に説明を聞いている姿がありました。



苦手なこと、得意なこと

障害者グループホームについての説明が終わると、プラスWeの細谷さんから「みんなは苦手なことはあるかな。私は地図を見るのが苦手なんだけど・・・」と子どもたちに問いかけがありました。さっと挙手する4年生の子どもたち。「自分も道に迷いやすい」「球技は苦手」「気持ちを切り替えること」「たくさんの漢字を覚えること」「忘れ物をなくすこと」「時間を守りにくい」「早く寝ること」など、安心できる教室の中で、自分の苦手をたくさん発表する様子が見られました。

子どもたちから苦手をたくさん聞いた細谷さんは、グループホームで暮らすかたがたについて、「みんなも苦手なことがあると思うけど、障害のある人たちは、周りの人から見て、多くの人と比べて、苦手なことが多いかも？と思われている人のことだよ」と説明してくださいました。自分たちの苦手を直前に考えていたので、子どもたちも「なるほど」と理解することができました。

「じゃあ、みんなは得意なことはあるかな」と細谷さんから問われると、先ほどよりも勢いよく挙手する子どもたちの姿があり、各々の得意をたくさん発表してくれました。子どもたちの発表が終わると、グループホームの入居者さんたちが、「パンをつくること」「演劇」「そうじ」「本を読むこと」「絵を描くこと」「細かい作業」などたくさんの得意を伝えてくれました。みなさんはその得意が仕事につながっており、それぞれが行っている仕事についても、説明してくださいました。障害のある人とない人がともに働く「豊能障害者労働センター」やおいしいパンを作っ

ている「パンハウス・ワークランド」など様々な場所で働いているみなさん。入居者のかたがライフプラザにある「ゆっくり」で働いていると聞くと「行ったことある！」と反応している子どもの姿もありました。自分たちの身近なところに障害者のかたがたが、暮らしていることを実感できた瞬間だったように思います。

「障害」ってなんだろう

グループホームでは、入居者のかたがたで家事を行います。ただ、苦手なこともあるので、その際は、手伝いをしてくれるスタッフのかたと協力しながらやっていきます。洗剤の量などを間違えることもあるので、ミスをしないように気をつけていると入居者のかたもお話しされていました。

グループホームには、入居者のかたがたが安心して、わかりやすく暮らすことができるように一人ひとりに合わせた工夫がたくさんあることも教えていただきました。「季節(気温)に合わせた衣服を選ぶための表」「薬を飲む人のためのお薬カレンダー」「忘れ物をしないための絵」など様々なものがありました。一人ひとりの苦手を助けるための工夫ばかりです。

最後に、細谷さんから「障害」についてのお話がありました。グループホームの工夫もそうでしたが、「その人にとってわかりやすくしていくこと、必要な助けがあることで暮らしやすくなる」「障害は、その人のまわりにその人の障害となるものが多いということかもしれない」「みんなで助け合うことで、誰もが住みよいまちにしていこう」と、共生社会を考えていく上でとても大切な事を伝えてくださいました。授業後のふりかえりの時間では、これまで4年生が総合的な学習の時間などで学んできたことと、今回の「出会い」を結びつけることができている子どもたちの姿がありました。当事者のかたがたとの出会いが子どもたちの学びを深めるということがよくわかる取組でした。

いきいきさわやかに学ぶ会
「あなたの身近にもいる　LGBTQ＋
～男女やLGBTだけじゃない！　性のあり方は十人十色～」

令和4年11月8日(火)に第5回イキイキさわやかに学ぶ会がありました。講師である井上鈴佳さんは、ご自身がレズビアンであることを公表されています。中学校や高校で養護教諭としての勤務を経て、現在は学校や公共団体等、様々な場所で、授業や講演会を実施されています。

講演は、多様な性のありかたについて、ご自身とパートナーのかたとの出会いや日々の暮らしなどのお話も交えながら、終始、明るく和やかな雰囲気の中ですすめられました。

ご自身とパートナーのかたの経験を元に作成された紙芝居「ぼくはそらくん」の読み語りから講演ははじまり、LGBTQ+のかたを取り巻く、法律の壁や周囲の理解のありかたなどもお話しくださいました。

井上さんは、24歳の時にご自身がレズビアンであることに気づかれました。保健室に来室したある生徒さんからの相談がきっかけとなり、性についてご自身が学びを深める中で、気づかれたそうです。

自覚のタイミングは、人によって様々で、3、4歳から気づく場合もあれば、60歳や80歳などで気づかれる場合もあるそうです。女性あるいは男性のどちらかを自覚すると言うわけでもなく、日によって、感じかたの割合が変わる場合もあり、性のありかたや感じかたは、とても多様なのだそうです。

もし、自分の周りにはLGBTQ+のかたはいない、と思っておられるかたがいるとすれば、それは、当事者が他の人に伝えていない、周囲が気づいていないだけだと言います。実際、井上さんが学校へ講演に行か

れた際には、終了後の個別相談の時間に多くの子どもたちが自分の性について、相談に来るそうです。

今回の講演の中でも参加者からの質問に丁寧に答えて下さいました。例えば、「自分の子どもが好きになる対象が異性なのか同性なのかで、親として悩んでいる。親から聞いてあげた方がいいのか」という質問には、「本人も恋愛対象なのか憧れの対象なのか、わからないかもしれない。自分は、親へのカミングアウトに一年かかった。なので、あなたはあなたとして大事な存在だ、一人の人間として大事に思っているというようなメッセージを常に保護者のかたから発信することで、今なら言えるかなっていうタイミングで、教えてくれるんじゃないかなって思います」とご自身のご両親とのエピソードも交えながら、お話しされていました。

井上さんが授業や講演をするきっかけとなったのは、あるアンケート調査でLGBTQ+のかたの全体の65.9％が自死を考えたことがあり、14％が自殺未遂をしたことがあるという結果を知ったことだそうです。セクシュアルマイノリティーに関して、幸せに生活している人の情報を得るのはなかなか難しいと言います。なので、井上さんは「いろんな性を表現しながら、幸せに生活されているかたがたの姿というのを、授業で写真なども紹介することで、ちょっとでも未来に希望を持ってくれる子が増えてくれたらいいなあ」と思いながら話をされておられます。

井上さんは、カミングアウトしたときに、相手から言ってもらえたらうれしい、という三つの言葉も伝えてくださいました。

「言ってくれてありがとう」
「何か困ってることはない？」
「誰に言いたくて誰に言いたくない？」このようなことを言ってもらえることで、井上さんは安心した気持ちになるそうです。

参加者からは、「LGBTQ+について若者世代は理解があるが親世代はまだまだ偏見があるのかも知れないと感じています。日本ではまだまだ難しいかもしれませんが、純粋に『好きな人』と結ばれることが受け入れられる世の中になることを願っています」や「性に関してだけでなく、人それぞれを認め、『あなたはあなたのままでいい。大切な存在だよ』と相手に伝えていくことが、相手の自尊心を高め、生きる力や何かをやる力につながると、私は気がつけました」などの感想が寄せられました。

井上さんは、「本当は、『LGBTQです』とも『アライです』とも言わなくていい時代が理想であり、そういうふうになっていくといいのかなあ」という願いを最後に語られました。

カミングアウトしてもらったら？

- まずは、「話してくれてありがとう。」
- 話は途中でさえぎらず、最後まで聞く
- セクシュアリティを決めつけない
- どうして伝えてくれたのか、何に困っているのかを聞く
- 理解者（当事者・アライ）とつながれるための情報を提供する
- アウティングは絶対にしない。誰に話しているか。誰に話してもいいかは必ず本人に確認する。

あすチャレ！スクール
～パラスポーツをとおして　共生社会を考える～

令和4年7月13日（水）及び、10月17日（月）から20日（木）の間に、北小、東小、萱野東小、萱野北小、彩都の丘学園の5校においてパラアスリートから学ぶパラスポーツ体験型出前授業「あすチャレ！スクール」が実施されました。

今日からできるサポート
～アライになってくれませんか？～

◆アライ（ALLY）＝「味方」の意。

◆[アライ]として今日からできること

・周囲に当事者がいることを意識して、使う単語を変えてみる。
おかま・ホモ→[ゲイ]、レズ→[レズビアン]、元女・元男→[トランスジェンダー]

・無意識の偏見に気づく&なくす。
彼氏・彼女→[恋人・好きな人・パートナー]、男らしい・女らしい→「自分らしい」

・性に対する自覚は変わったり揺らいだりすることもある。すぐに決めつけたり、解決に走ったりしない。どうして欲しいかは人によって違う。その人がどう考え、何を望んでいるのか、本人の気持ちによりそい、時間をかけてじっくり本人と話し合う。

「あすチャレ!スクール」とは、日本財団パラスポーツサポートセンターが主催するプログラムで、子どもたちにパラアスリートとの交流を通じ、共生社会への気づきと学びの機会を提供できるよう、全国の小中高等学校等を対象に行うパラスポーツ体験型出前授業です。共生社会とは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様なありかたを相互に認め合える全員参加型の社会のことです。

講師（7月13日実施分）
根木　慎志　さん
・シドニー世界車いすバスケットボール選手権大会出場
・シドニーパラリンピック男子車いすバスケットボール日本代表チームキャプテン
※高校3年生時に、突然の交通事故で脊髄を損傷。

講師（10月17日から20日実施分）
加藤　正　さん
・パラリンピック夏冬あわせて5回出場
・長野冬季パラリンピック「アイススレッジスピードレース」銀メダル2個、銅メダル1個獲得
※小学2年生の時、骨肉腫により、左脚大腿部から切断。

今回は、10月20日（木）に彩都の丘学園の4年生を対象に行われた際の様子を紹介します。

授業は約90分間で、「デモンストレーション」「パラスポーツ体験」「講話」の三部構成で行われました。

デモンストレーションを行う前には通常の車いすと競技用車いすの違いを加藤さんから教えていただきました。日常生活用で使用する車いすとは違い、スポーツをするために工夫されている点について学びました。加藤さんが児童の座っている周りを競技用車いすで一周すると、子どもたちは「うわっ、はやい!」「すごい、かっこいい!」「バンパーの位置がわかった!」など思わず声が出ていました。児童たちは、すでに加藤さんに興味津々です。

実際のデモンストレーションでは、ドリブルや車いすからの見事なシュートを披露していただきました。同時に、シュートが決まるとみんなで「ナイスシュート!」、シュートが落ちても「どんまい!」や「がんばっ!」といつでも前向きな言葉で応援をする大切さを加藤さんから学びました。デモンストレーションの最後は、距離のあるシュートに挑戦です。児童たちの心を一つにした手拍子での応援の結果、見事シュートは決まり、大きな拍手と歓声が体育館を包みました。

次のパラスポーツ体験では、代表児童30名が、実際に競技用車いすに乗り、5対5の車いすバスケットボールのミニゲームを3試合に分けて行いました。児童たちは、慣れない競技用車いすの操作に苦戦しながらも、周りの児童たちからの声援や、加藤さんからのアドバイスを受けながら、一生懸命プレーをしていました。

体験後には「やってよかった。もっとやってみたい」「あんまりバスケットボールは得意じゃないけど車いすにのってうまくできて楽しかった」など一人ひとりがみんなの前で感想を発表しました。

そして加藤さんからの講話では、加藤さんがパラスポーツを通じて得た経験を交えたお話から、「障害」についてや、夢や目標を持つことの大切さについて学ぶことができました。

講話の最後に、加藤さんは「はじめから無理だと思ってしまうことだってあるかもしれないけど、スポーツでも、音楽でも、英検でも漢検でも

何でもいいので、ぜひ色々なことにチャレンジしてください。失敗してもいい。チャレンジをすることで、きっと、自分の武器を見つけることができます。」と児童たちに語りかけてくださいました。

プログラム終了の際に、代表の児童が、今回の体験について「体験や話を通じて障害のことがわかった。これからまちの中で障害のあるかたに出会ったら、お手伝いしましょうかと声をかけてみたい」や「バスケットボールはボールが飛んでくるのがちょっと怖いかもと思っていたけど、今日のお話を聞いて、これから私もチャレンジしてみようと思いました」などと感想を発表しました。

どの学校で実施した際も、子どもたちは講師のパラアスリートのかたとの出会いを通じて、障害を理解することや自分たちの生きかたについて学ぶことができる取組となりました。

学校図書館司書コーナー
図書館で「つながる」趣味の輪
～折り紙をとおして～

西南小学校の図書館には子どもたちが学校の休み時間や自宅で作成した折り紙作品が並んでいます。折り紙は、忍耐力・集中力が育まれ、完成させることで達成感や自信をつけることができる伝承遊びの一つです。

最近の折り紙は「おりがみあそび」では済まされない、技術を要する「折り紙アート」と言っても過言ではない程、繊細かつ大胆なものに変化しています。そこに心惹かれチャレンジ精神をくすぐられ、折り紙を折ることを趣味にしている子どもがたくさんいます。

「最近の折り紙はすごいなぁ」と子どもたちと会話する中で、「僕も折れるで！今度、折ってくるわ！」とキラキラした瞳で図書館を去ってから数日後、彼が図書館に持ってきてくれたのは、一枚の紙から作り上げられたロボットでした。私が感動してみんなにも見てもらおうと図書館に飾り始めたのがきっかけで、今では小学校低学年から高学年までの子どもたちがいろいろな作品を届けてくれるようになりました。

お友だちの作品を見て刺激を受け、折り紙の本を借りてチャレンジする子どもや、今まで作ってきた作品を限りなく小さく折った作品、さらに技術を磨き今まで折ったことがないハイグレードな「くす玉折り紙」を作り上げる子どももいます。今度は何に挑戦し、どんな作品が図書館に届けられるのかみんなワクワクしています。

折り紙だけではなく、絵本のお届けもありました。箕面市では長年【箕面手づくり紙芝居コンクール】が行われてきたからなのでしょうか、お友だちとふたりで考えた物語をもとに絵本を作成し、手作りの貸し出しバーコードも貼り付け（実際には貸し出しはできません）、図書の時間に自分たちのクラスで読み語りを実施してくれました。

野球・宇宙・昆虫・電車・韓国語など、子どもたちの数だけ趣味や興味があります。子どもたちの興味のその先・その奥への手助けができる図書館でありたいと思っています。学校図書館にはたくさんの本や資料がありますが、学校内だけでは対応できないこともあります。しかし、箕面市には他校の図書館や、

公共図書館から本を取り寄せることができる図書館ネットワークがあります。このシステムを活用し、これからも子どもたちの読みたい・知りたい気持ちの追求に応えられる図書館でありたいと思っております。

（西南小学校　図書館司書　山田　康子）

編集後記

コロナ禍と言われるようになり、３年が経過しました。その中でも学校園所をはじめとして市内では、感染症対策など工夫を凝らし、出会いをとおした人権教育の取組が推進されています。対面やオンラインなど形式はさまざまですが、人と人との出会いは、学びを深め、生きかたを豊かにしてくれます。今後も「はじけるこころ」では、そのような子どもたちだけでなく、大人の生きかたも広げられる取組を学校園所や地域のみなさまに紹介させていただきます。

執筆や編集等にご協力いただいたみなさま、誠にありがとうございました。

「はじけるこころ vol.55」はいかがでしたか？

みなさんのご意見・ご感想をお聞かせください。下記の①～④の内容を、郵送、ファクスまたはEメールにてお送りください。これからも人権教育に関心をもっていただける記事を掲載したいと思っておりますので、ぜひともお言葉をいただけることを編集委員一同お待ちしております。

記

①ご意見・ご感想、②お名前（無記名でも構いません）、③「はじけるこころ」の入手方法、
④（「はじけるこころ」に掲載する場合がありますので）ご意見・ご感想掲載の可否について

〒562-0015　箕面市稲 1-14-5　箕面市教育委員会人権施策室
FAX ： ０７２－７２５－８３６０
Email ： edujinken@maple.city.minoh.lg.jp